

論文審査の結果の要旨

論文題目

知的障害特別支援学級向け漢字指導プログラム開発に関する研究

論文提出者

河村 優詞

審査委員：(主査) 眞邊一近

(副査) 北野秋男 河嶋孝

論文審査要旨

1. 本論文の構成

本論文の構成は以下の6章からなっている。

第1章 小学校知的障害特別支援学級の社会的状況

第2章 漢字指導の社会的状況

第3章 調査

第4章 実験

第5章 指導プログラム開発と実用試験

第6章 総合考察

2. 論文の概要

本論文は小学校の知的障害特別支援学級向け漢字指導プログラム開発を目的とする研究であり、1章「小学校知的障害特別支援学級の社会的状況」、2章「漢字指導の社会的状況」、3章「調査」、4章「実験」、5章「指導プログラム開発と実用試験」、6章「総合考察」によって構成されている。

1章「小学校知的障害特別支援学級の社会的状況」では文献のレビューを行い、小学校の知的障害特別支援学級を取り巻く社会的状況を考察している。インクルーシブ教育の推進や合理的配慮の提供等、特別支援学級には様々な社会的要請がなされているが、教師の多忙さや教材の不足によって社会的要請に応じることが困難になっている可能性があり、教材開発等の推進が必要であるという結論を得ている。

2章「漢字指導の社会的状況」では文献のレビューを行い、特別支援学級における漢字指導の重要性や、その周辺の領域における漢字指導に関する社会的状況を考察している。特別支援学級在籍児童に対する漢字指導は児童の将来の日常生活や就労にとって重要な指導事項であり、実証研究とそれに基づく教材が不足していることが示されている。これらの考察を踏まえ、実証研究に基づく特別支援学級向け漢字指導プログラムの開発を研究全体の目的として設定している。

3章「調査」では特別支援学級担任を対象に2つの質問紙調査を実施している。

調査1では特別支援学級における漢字指導の実態について調査を実施している。結果から、特別支援学級では通常学級と比較してゆるやかなペースで漢字指導がなされている可能性があり、教師は漢字指導に関する様々な困難を感じていることが指摘されている。

調査2では特別支援学級において漢字教材に求められる仕様に関し、マスや文字の大きさを中心とした調査を実施している。その結果から特別支援学級では通常学級よりも大きなマス、大きな文字の漢字教材が必要であることが示されている。

4章「実験」は本論文の中心となる章であり、実証研究に基づく漢字指導プログラムの構成訓練法の検証のため、10個の実験を実施している。

実験1では、単に漢字の筆記を反復する条件、筆記の反復に加えて仮名を弁別刺激とし

て漢字を筆記する条件、筆記の反復に加えて仮名と合った漢字を線で結ぶ課題を行う条件、以上の3条件で学習させた際の書きテストの成績を比較している。その結果、仮名を弁別刺激として漢字を筆記する場合、成績向上が見られることがあり、仮名と合った漢字を線で結ぶ課題を筆記学習の後に行うと、一時的に成績が低下することがあったため、筆記学習の前や復習時に実施するべきであることが示されている。

実験2では、単に漢字を筆記する条件、振り仮名と交互に漢字を書く条件、プリントに挿絵を付す条件、以上の3条件で学習させた際の書きテストの成績を比較している。その結果、振り仮名と交互に漢字を書く条件、プリントに挿絵を付す条件で成績向上が見られたことを報告している。

実験3では、筆記学習と併せて翌日学習する漢字を見せて次回予告をする条件、次回予告をしない条件間で、書きテストの成績を比較している。その結果、次回予告によってテストの成績が向上する児童がいることが示されている。

実験4では、漢字の筆記学習における集中練習と分散練習の書きテストの成績に及ぼす効果を検討している。その結果、分散練習の方が一週間後のテスト成績が高いことがあったが、学習直後のテストでは集中練習において成績が高い傾向があり、書字の長期的な維持に対して分散練習が有効であることを報告している。

実験5では振り仮名入り文章の音読の漢字読み成績に及ぼす効果を検討している。その結果、音読のみで読みが獲得されるケースがあったが、成績上昇が見られない箇所もあり、補助的な指導方法として用いるべきであるという結論を得ている。

実験6では児童の書字の正確性向上を図る方法として、自己評価および自己+他者評価の効果を検討している。結果、自己評価のみで書字に改善が生じるケースがあったが、自己評価のみで改善が生じない場合、自己評価と教師による他者評価を併用する方法で書字の改善が見られるケースがあり、書字改善に有効な方法であると結論している。

実験7では筆順の修正について検討している。色・数字刺激によってプリントに筆順を示すことで誤った筆順が修正されるだけでなく、1つの漢字の筆順指導が類似した構成要素を有する他の漢字に般化し、複数の漢字の筆順が修正されることがある事例を報告している。色・数字刺激によってプリントに筆順を示すことが、筆順修正に有効な方法であると結論している。

実験8では漢字学習への従事を促進する方法として、高選好課題及び課題の選択機会を与える方法の効果を検討している。その結果、低選好課題の筆記回数が多い教材であっても、高選好課題や選択機会が後置されると児童から選ばれることがあり、課題従事を促進しうる方法であると結論している。

実験9では児童の学習を阻害する要因として、誤字を消しゴムで消す行動の選好傾向を検証している。その結果、消しゴムで消す行動を一貫して選好せず、消しゴムの使用が嫌悪的な事態であると考えられる児童が存在したが、逆に誤答を周囲に見られることを避けるため、消しゴムで消す行動を選好する児童も見られ、消しゴム使用の有無を各児童毎に選択させる実践形態が望ましいと結論している。

実験10では児童の日記記述において漢字使用を促進させる方法を検討している。日記内の漢字使用数を得点化して児童にフィードバックすることで、日記内での漢字使用率が増加し、児童内で得点を相互に称賛する事態が観察され、さらに漢字を教師に聞く質問行動も増加したため、漢字使用促進に対して有効な介入であったと結論している。

5章「指導プログラム開発と実用試験」ではここまでの研究を基に指導プログラムを作成し、授業で用いて児童への有効性や教師の使用感を検証している。

実用試験に先立ち、ユニバーサルデザインに関する研究をレビューし、色覚の多様性に

配慮することや誤答に対して寛容性のある教材とすること等、16項目からなる教材開発のガイドラインを試作している。

また、集団への指導を実施するメインの実用試験実施に先立ち、予備実用試験を実施している。ここまでの研究結果をまとめてメイン教材、テスト、指導マニュアルからなる指導プログラムを作成し、重度知的障害を伴うダウン症児へ担任および支援スタッフが指導した際の効果を検証している。その結果、従前には獲得されていなかった漢字書字20文字が獲得され、維持成績も良好であり、書字獲得に有効な介入であったと結論している。また、教師に対して使用感を問う半構造化面接を実施し、教師は指導プログラムに肯定的な印象をもっていると報告している。

実用試験Ⅰ期では指導プログラムの改良を行い、著者が児童6名に指導し、漢字を単に反復筆記する視写課題と本研究における指導プログラムの比較を行っている。その結果、視写課題で漢字書字獲得が進まない児童であっても本研究の指導プログラムで獲得が進み、維持成績も視写課題より良好であったため、有効な指導法であると結論している。

実用試験Ⅱ期では細部を改良した指導プログラムを用いて3名の教師が15名の児童に指導している。全児童で筆記可能な漢字数が増加したが、誤答の多い児童も存在し、より誤答を減らして効率的に学習を進めるために改善が必要であることを指摘している。また、教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施し、教師は指導プログラムに肯定的な印象をもっていたと報告している。

実用試験Ⅲ期ではさらに改良した指導プログラムを用いて経験年数20年以上の者を含む3名の教師が11名の児童に指導を実施している。全参加児で漢字書字が獲得されたが、より誤答を減少させる方法を検討する必要性を指摘している。また、教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施し、教師は指導プログラムに肯定的な印象をもっていたと報告している。

実用試験Ⅳ期では、教師が任意に選択・使用できるオプション教材を作成した他、指導プログラムの細部を改良し、特別支援学校勤務経験者を含む3名の教師が12名の児童に指導している。全試行のテストが全問正答で完全に無誤学習となる児童が4名いるなど、全般的に高い指導効果が得られ、有効性が高かったことを報告している。また、オプション教材のプリントを複数種類使用し、児童に課題の選択機会を与える方法をとることで、学習従事を拒否する傾向の児童も安定的に学習に従事することができた点など、学習を促進する上で有効であると報告している。また、教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施し、指導プログラムに肯定的な印象をもっていると報告している。

実用試験Ⅳ期の参加教師1名より、指導プログラム全容が分かりにくい旨の意見を得たため、指導プログラムの全容が短時間で把握できるようにマニュアルを作成し、教師3名に評価を依頼している。その結果、読むことに要した時間は全員4分以下と短く、その後実施した負担感などを問う質問紙調査では全教師からおおむね肯定的な回答を得たことから、教師に受け入れられやすいマニュアルであったと結論している。

6章「総合考察」ではここまでの研究を総括し、研究の独自性と成果、課題や展望について考察している。

3. 本論文の成果と今後の課題

(1) 本論文の成果

本論文は次の点で評価される。

知的障害特別支援学級向けの漢字指導プログラムはこれまでに開発されていなかったが、本論文では実証研究に基づく有効性の高い指導プログラムの開発に成功している。

指導プログラムの開発過程において、文献のレビューや質問紙によって現場実態を明ら

かにし、現場の問題を明らかにしている。さらにその結果を基に行動分析学に基づく10個の実験を実施し、指導プログラムを構成する効果的な教授法の実証的知見を得ている。その後、調査および実験結果に基づく指導プログラムを作成し、そのプログラムの実用試験を実施した。その結果、知的障害の程度や種類等の多様な障害を有する児童らに共通して一定の有効性があるという結果を得ており、指導プログラムの開発に成功している。また、指導にあたった教師側からも、実用性に関して肯定的な所感を得ている。特別支援学級における漢字指導について児童・教師双方を対象とする研究はこれまで報告がなく、本論文のオリジナルな成果である。

本研究の実験・実用試験では多くの児童が参加しており、実用試験Ⅱ期はほぼクラスワイド介入となっていた。個別指導を中心とした先行研究と比較すると、規模の大きな研究であった。

本研究の各実験・実用試験は保護者の同意を含む児童への倫理的配慮の下に実施され、社会的妥当性も確認されている。少数例の実験では複数の条件を同時に検証するのは困難であるが、その問題点を解決する方法として統制された条件交替を伴う操作交代デザインを用いるなど、今後の特殊教育分野などの少数例の実証研究に有益な方法論上の貢献も見られる。

(2) 本論文の今後の課題

本論文は上記のような意義が認められるが、いくつかの課題が残されている。

第一に、当該分野としては、研究対象者の人数規模は比較的大きいものであるが、様々な障害を持つ児童生徒を網羅的に対象としているわけではなく、今後、より広範な障害児を対象とした実証データを得る必要がある。

第二に、実用試験において、漢字の読み書きの獲得水準が、児童が意味を理解している語彙水準を上回っている可能性があるケースが存在した。これは、意味の理解を伴わない漢字学習が行われた可能性があることを示している。語彙の理解無しには、漢字が読め、書けたとしても、漢字を使えることには繋がらない。今後は、漢字の読み書きを教示すると同時に、語彙の理解を促進する教授法も追加していく必要がある。

第三に、現場の状況を踏まえ、多くの児童に共通した方法で指導を実施することを前提として開発が行われたが、一部に有効性が低い児童が存在している。効果が少ない障害児に対する教授法の検討も今後必要である。

第四に、教室場面で漢字学習がなされても、障害児の日常生活や将来職業に就いたときの漢字使用に繋がるとは限らない。日記使用について検討しているが、日記以外の訓練場面から訓練場面以外の生活に般化させる方法の開発も残された課題である。

以上のように本論文には若干の問題点や不十分な点が残されてはいるものの、価値のある新たな試みを多く含む内容であり、特別支援教育における学習指導法と教材開発に対して重要な示唆をもたらすものとなっており、本論文で報告された諸研究は特別支援教育における研究・実践における発展が期待できる。

よって、本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

令和2年1月30日